

基調講演要旨

ソーシャルワークのグローバル定義が果たす対人援助の意義

公益社団法人東京社会福祉士会幹事
ルーテル学院大学名誉教授・博士（社会福祉学）
福山和女

国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）が2014年に採択した「ソーシャルワークのグローバル定義」は、それに先立つ2000年に同連盟が定めた「ソーシャルワークの定義」を改訂したものである。旧定義によるソーシャルワークは、「原因を取り除くことで問題を解決する」という“引き算的”な取り組みが想定されており、当事者においてなされてきた従前の取り組みには強調点が置かれてこなかった。新定義によるソーシャルワークは、当事者の尊厳を保持しつつ、それまでになされてきた取り組みも十分認めたとうえで、「生きる上での課題を達成する」ために“足し算的”に努力を積み上げていくという視点を打ち出している。

定義改正の背景には、福祉分野における人材不足、社会資源不足、ケアサービスの質の低下といった問題がある。きっかけは介護保険。要介護認定で解決すべき問題を抽出し、それを取り除くためのケアプランを作成・提示し、サービスを調整するという流れが定式化され、相談援助はもはや「誰でもができるケア」として扱われるようになった。

現在、福祉現場でのスタッフは、常勤職と非常勤職が2対8の割合になっている。非常勤職員には業務遂行の責任を免除しているため、残り2割の常勤職員がその責務を負わざるをえない状況で、特に管理者層の職責が過重になっている。管理職を任じる辞令に対して「いやです。やりたくありません」と固辞する例が多発していると聞く。

しかし福祉ニーズは多様化・複雑化してきており、今後さらにその傾向は強まっていくだろう。個人としての特定の問題を解決するだけでは足りず、地域社会システムへの包括的総合的效果を出すための策が必要となっている。

ソーシャルワークの新定義は、ソーシャルワーカーの活動領域を「個」から「社会」「圏域」へと拡大し、経済状況や人口流動化を視野に入れたものとなった。すなわち、今日的なソーシャルワーカーのありべき姿を的確に示しているといえよう。

ソーシャルワークの新定義は、対人援助の実践にも変化をもたらした。従前の旧定義のもとでは、面接の開始にあたって発する言葉は「どうされましたか？」だった。これは相手が「問題を抱えていて、

解決してもらいたいと望んでいる」ことを前提とした問いかけであり、原因を取り除いて「問題解決してあげる」支援へとつながっていく傾向が強い。新定義のもとでの第一声は「この相談機関をどうやってお知りになりましたか？」である。相談者がこれまでにすでに可能な限りあらゆる工夫をして生きてきたことを認識することが必要であろう。

かつて相談援助の専門職の役割は「情報提供」だった。アセスメントのうえ、制度等に関する知識、価値観、技術、方法論などを駆使して専門情報を提供するのが仕事だった。しかしネット社会の今日においては、専門情報を得るだけなら誰もができることである。一方で、多様化・複雑化するニーズに対応するべく、資源開発やソーシャルサポート・ネットワーク形成も含めた「コミュニティを基盤としたソーシャルワーク」を展開する上で、多かれ少なかれ制度や地域文化の限界に直面することになる。これらは「解決すべき問題、取り除くべき障害」ではない。積み重ね、歩みを前に進めることによって「達成すべき課題」である。

東京社会福祉士会をはじめとする職能集団に期待することは、さまざまな“しがらみ”と折り合いをつけざるをえない個々のソーシャルワーカーに対して専門職として、包括的・総合的にサポートする立ち位置から、各局面での限界を突破するための「実践の開発と創造」である。学識者に教を乞う時代はもう終わった。ソーシャルワークの職能集団として機能を十分に発揮して、考え、計画して、開発・創造して欲しい。

(文責：公益社団法人東京社会福祉士会 広報推進本部)